

河村只雄日記について——「河村只雄日記行程表」をもとに——

齊藤 郁子 †

はじめに

- 1 河村只雄日記の概要
 - 2 「日記」の内容
 - 2-1 1936年（昭和11）
 - 2-2 1937年（昭和12）
 - 2-3 1938年（昭和13）
 - 3 河村の調査をめぐって
- おわりに
- 付録 河村只雄日記行程表

はじめに

社会学者の河村只雄は、1936年（昭和11）から5回にわたり南西諸島と台湾の調査を行った。河村の遺した資料は沖縄県公文書館（以下、「当館」と記す）に寄贈され、そのうちの写真資料はすでに整理がなされており、武智方寛氏によって被写体の特定作業も行われ、その成果は当館紀要第6号に掲載されている¹。

しかし、河村の調査・研究を跡付ける資料と見られる彼の日記は、その概要が知られているとはいえない。そのため、本稿では河村の沖縄調査とその背景などについて、当館所蔵の日記をもとに辿り、資料として利用に供する一助としたいと思う。

1 河村只雄日記の概要

当館で所蔵している河村只雄の日記は、「河村只雄資料」のうちの「日記」（0000049937、0000053811、0000061307。閲覧用マイクロフィルムはT00021098B。以下、「日記」と記すものは当館所蔵資料の日記を指す）というタイトルで整理されている資料である。これは1936～1938年（昭和11～13）の日記であり、河村が南西諸島と台湾を調査していた時期を網羅しているものではない。写真資料には1939年撮影と思われるものもあるのだが²、上記3ヵ年分以外の日記は不明である。河村の次男で資料寄贈者の河村望氏も「三九、四〇年の日記は、どうしたわけか手元にはなかった。」（河村望1999:p.545）と述べており、当館に寄贈される以前に所在が不明になっていたものようである。

これらの日記が書かれているのは、博文館が発売していた「常用日記」と銘打たれた1日1頁の日記帳である。末尾に「補遺」としてフリースペースが設けられている。この日記帳に河村は1日1頁をほぼ守り、1日の欠けもなく書き記している。調査に出かけていた日々もほぼ1日1頁の記述で、特に記述の多い日は末尾の「補遺」の部分に書き込みをしている。

また、日記帳には調査時のメモと思しき紙が数葉挟み込まれており³、調査内容を記録したと思われる

† さいとう いくこ 財団法人沖縄県文化振興会 一般嘱託員

¹ 武智方寛 2004 pp.115-133

² 武智 2004 参照

³ 例えば昭和11年の日記には、那覇に到着した10月22日から10月27日までの調査メモが挟み込まれている。10月22日に那覇港へ到着した際に出迎えてくれた人、旅館や県庁へ向かったことや、10月23日に奥武山公園の招魂祭に列席した後、糸満へ行った等の調査行程が箇条書きに記されている。

る資料が別に存在したこともうかがわれる。『南方文化の探究』の「宮古文化の探究」にも、「覚えがきの大事な手帳をなくして今その名前が思い出せないのは残念である。」(河村只雄 1999:p.223)とあり、日々の日記とは別の記録があったことを示す記述である。だが、河村がなくした手帳とは別の「調査ノート」とでもいうべきものが1冊当館に寄贈されている。市販のノートで表紙に「台湾から琉球/昭和十三年五月/調査の旅/no2」と書かれ、学術的な調査内容が書き留められているものである。

2 「日記」の内容

今回は河村のこの「日記」を、年月日、調査行程、写真や8ミリでの撮影、記述のある人物、『南島文化の探究』のどの部分に相当するかという点で整理し一覧表の形で示した(後掲「河村只雄日記行程表」)。

2-1 1936年(昭和11)

1936年の調査は、沖縄本島、久高島、宮古、八重山に渡っており、河村の著書『南方文化の探究』の冒頭、「琉球文化の探究」の部分にあたる。ただし、「琉球文化の探究では」旅の出発を10月16日としているが、日記には神戸出発を10月19日、3日後の22日に那覇入港の記述がある。

西表島の祖納を11月15日に出発し、16日には台湾・基隆港に到着、11月20日まで「視察旅行」に入っている。

2-2 1937年(昭和12)

この年の調査は7月21日に那覇港に到着してから、8月8日に沖縄を離れるまでの比較的短い期間で、7月25・26日は「講習会」が入っていた。25日は「非常時局と教学の刷新」という講演を行い、同日の夜は一般のための講演会で「非常時局克服の力」という演題で話している。26日は「家族・私有財産及び国家」という演題であった旨を河村は日記に記している。

この時の調査には、8ミリカメラを持参しており、日記にも浦添村字宮城の闘牛、今帰仁城、識名園、等々を撮影している。おそらくこの時のものが河村只雄資料のうちの「沖縄本島及び周辺離島の風物」の映像なのではないかと思われる。ただし、7月31日の日記には、8ミリのフィルムが暑さでとけて動かなくなり、これを直すためにフィルムを半分犠牲にしたと記されており、夏季の沖縄での調査の苦労もみてとれるものである。この年の調査は上記の映像資料を残したが、『南方文化の探究』にはこの時の調査内容はほとんど反映していないようである。

2-3 1938年(昭和13)

この年は、4月26日～5月20日までが台湾調査、5月21日に西表に到着してから6月15日までが八重山、与那国の調査で、6月16日に宮古へ入り7月10日まで滞在し調査した。この時には各地の豊年祭を見学し、現地の古老・神職たちから聞き取り調査を行っている。現在残っている日記を見るかぎりにおいては、期間の長さとともに内容も充実した調査であったと思われる。そして、この時の調査が『南方文化の探究』の「高砂族文化の探究」「八重山文化の探究」「宮古文化の探究」の元となったと考えられる。

河村の日記は、文字通り私的な「日記」であり、おそらく公表を念頭においては書かれてはいないであろうと思われる。というのは、『南方文化の探究』では、具体的に記述するのは憚られることも日記ではその事情がわかる記述が見られるからである。公刊されるものに記述するのは不相当と判断し河村があえて明かさなかった、島の現実もまたそこには記録されているのである。

3 河村の調査をめぐる

『南方文化の探究』にも、河村の調査には沖縄の教職員が協力していることがたびたび書かれているが、日記ではそれらの人物の名前が逐一挙げられていて、実際に河村がどういう人脈を頼って調査を行ったかがわかる。彼ら協力した教職員は「研究所関係のもの」「前研究員」（河村 1999:28 頁）と記されており、河村の職場である国民精神文化研究所と関わりがあったことがうかがわれる。

この国民精神文化研究所とは、『国史大辞典』によると、「第二次世界大戦前における文部省直轄研究所の一つ。一中略一『学生左傾』の対策として、国体・国民精神の原理を明らかにし、マルキシズムに対抗する理論体系の建設を目標とする研究機関の設立があげられているので、これをうけてこの研究所が設けられたのであろう。一中略一組織は研究部・事業部の二部から成り、事業部では、全国中等学校教員の再教育（教員研究科）ほか、いわゆる『左傾学生』の指導矯正にあたる研究生指導科があった。——後略」（田中久夫 1985:pp.692-693）という性格の機関であり、当時の沖縄県の教員達もこの教員研究科へ派遣されていたようである。この教員研究科は、将来を嘱望された教員が学校長から推薦される場合が多く、再教育期間は6ヶ月で、月々学資が支給されていた⁴。この教員再教育の事業を通して河村は沖縄の教員たちとの繋がりを得たものであり、教員研究科の同窓組織である「志同会」⁵のメンバーが河村の歓送迎会を開いていることからそれがうかがわれる。

「日記」には、沖縄の教員達の中には、河村の調査に同行し現地の住民との繋ぎをするなどコーディネーター的役割を果たす者もいたことが記されている。例えば、「日記」の1938年の6月11日に、小浜の「ノリト」「神歌」の採集の手はずを校長と山城訓導に整えてもらうよう依頼し、12日には山城訓導が数名の村の有力者たちに事前の説明をおこなった上で河村がさらに調査の主旨を述べ諒解を求めている。

また、河村は地元の教員に予備調査を依頼していたことを裏付ける資料も当館に寄贈されている。表紙には「昭和拾参年六月二十四日/調査事項/宮古郡/伊良部校」とあり、こよりで綴じられている。中にはガリ版刷りの調査依頼事項があり、その次に質問項目に対応する報告が学校の罫紙に記されている。その罫紙の上部欄外には人名が見えるが、これはその項目を調査した人物であろうか。河村は事前に現地の人々にこういった調査依頼項目を送付し、それに応える形で現地の教員たちが報告をある程度まとめていたことがわかるものである。

こういった現地の教員達や住民の協力を得ながら調査を行っているわけだが、それでも現地の人々に調査への協力が得られないこともあった。特にそれは神事に関わる調査に関してである。そこをあえて踏み込み、とくに禁忌と関わる神事や聖域の調査を行ったことに対し、河村には悪評がつきまわっているようである。

河村の調査に対して、子息の河村望は次のように記している。

「聞くとところによると、亡父は写真や八ミリを無遠慮に撮りまくって、調査地の人びとから顰蹙だけでなく、怒りを買っていたようである。亡父が五回目の調査の後すぐ死んだことについても、入ってはいけない神聖な場所に入り、写真や八ミリを勝手に撮ったのでバチが当たって死んだのだと信じていた人も多くいたと聞いている。亡父のしたことは、もちろん正当化されるものではない。——後略」（河村望 1999:546 頁）。

バチが当たったかどうかはともかく、河村の調査には上記のような言説がつきまとうことも事実である。

⁴ 前田一男 1982 : pp.62-63 参照

⁵ 前田 1982 : p.63 参照

野口武徳も、南島研究史において河村を評価する者が少ないことをふまえ、「それどころか、河村只雄はフラッシュをたいて島の人を驚かせたので、東京へ帰ってから病気で死んだのであるというような話を、好んで私達に語りつぐのであろうか。現実には河村が歩いた土地に行き、そういう話を聞かされたこともある。しかし、そういう話題になる人は、河村只雄自身も聞いているし、この私も多く聞かされている、まだ後述するように、河村自身、ある程度自覚してもいた。しかし死の直前まで沖縄を歩きつづけ、説明する時間も機会もなく彼は死んだ。残されたのは二冊の名著といじわるな風評だけであった。」(野口武徳 1980:p.116) と、河村の調査についての風評を述べており、河村の調査が負の方向に伝説化している様子がうかがわれる。

また、河村望は、「このように話が進んだなかで、さらに小屋から、調査時に収拾した資料として、鏡、勾玉、宝貝、わらざん、祭祀具などがでてきた。亡父が黙っていろいろな調査地から、このような貴重な資料をもって来るなどということはあるえないと思うので、なぜこのような貴重なものが家にあったのかはわからない。ただ、沖縄の人に頼まれて、国立博物館に資料をもっていき、博物館で受け取るのを断られて、亡父ががっかりしていたという話を、私は母親から聞いたことがあるので、そのような事情も部分的に関係していたのかもしれない。」(河村望 1999:pp.545-546) と記している。河村家に残されていたこれらの物の入手経路がどのようなものであったか、今となっては確かめるのは困難であるが、最後の沖縄調査から戻って間もなく河村が急死し、そのまま物品が残されることとなった可能性もあろう。しかし、また、「日記」には河村が聖域と古墳から瓶をもってきたということが記されており⁶、河村の功罪の「罪」の部分を記録している。

だが、それと同時に、水不足の水納島へ水を運ぶため船を借りようとしたり(結局とりやめになるが)、撮影した写真を集落の大勢の人に送るなど、あたたかいエピソードも見ることができる。著書『南方文化の探究』に結実する以前の、生き生きとした調査の記録であるということができよう。

おわりに

以上、見てきたように、河村の日記には、現地の教員たちの協力によって調査を進めていたことが詳細に記されている。彼らは予備調査をおこなう場合もあり、また河村に同行し通訳やコーディネーター的働きをするなど、大きな役割を果たしたのが、国民精神文化研究所の「研究員」を修了した教員たちという人脈である。必ずしも評判の良くない河村の調査に彼ら教員たちが同行し協力していたのは、文部省直轄研究所である国民精神文化研究所員への協力ということの他に、どのような背景があったのであろうか。河村が聖域に足を踏み入れる調査に、彼らはどのような考えから協力したのであろうか。これについては河村の「日記」から読み取ることはできない。

当時の教員たちも政府の教育政策に沿って動かざるを得ないものであり、思想教育に深く関わる国民精神文化研究所の教員再教育システムと河村の沖縄・台湾調査とが、当時の教育政策の流れを背景にすると、なんらかの方向性を示していたという側面はないのか。当時の沖縄の教育界を考える上で大きな問題をはらむものであり、稿を改めて考察したいと思う。

また、河村の『南方文化の探究』については、同時代の田中俊雄による厳しい書評⁷もある。当時か

⁶ 1938年の6月22日に来間の「ミヤーカー」から小さい瓶を、7月6日には池間の古墳から古い瓶を、それぞれ持って帰ったことが記されている。

⁷ 田中俊雄 1940 では、『南方文化の探究』に対し、「著者の専攻する学問が著者の体内に浸透して、ともに肉体化した著者のもつ直感の眼の低さ」「学者といふものが、真に眼のきいた文化の観察者であるならば、われわれ素人がその対象とするもの、根元となって働いてある本能のみこめないですごしてきた、さういふものを明らかに摘出して、われわれにしめしてくれることではあるまいか。」など、河村の記述の食いたらなさを記している。

ら現代に至るまでの、河村只雄の研究に対する評価を研究史の中で考察することも課題としたい。

参考文献

河村只雄[著] 『南方文化の探究』(創元社 1939年)

河村只雄[著] 河村望[解説] 『南方文化の探究』(講談社 1999年)

『河村只雄資料』「日記」(T00021098B) 沖縄県公文書館所蔵

河村望[解説] 河村只雄[著] 『南方文化の探究』(講談社 1999年) pp.544-560

小島瓊禮 「河村只雄の時代」『新沖縄文学』37号 (沖縄タイムス社 1977年) pp.127-134

武智方寛 「河村只雄写真資料の利用に当たって—特に被写体特定作業について—」 財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部[編] 『沖縄県公文書館研究紀要』第6号 (沖縄県公文書館発行 2004) pp.115-133

田中俊雄 「書評 河村只雄著『南方文化の探究』」『月刊民芸』(日本民芸協会 1940) pp.44-45

田中久夫 「国民精神文化研究所」 国史大辞典編集委員会[編] 『国史大辞典』第五卷 (吉川弘文館 1985) pp.692-693

野口武徳 「河村只雄」『南島研究の歳月』(東海大学出版会 1989年) pp.114-124

前田一男 「国民精神文化研究所の研究—戦時下教学刷新における『精研』の役割・機能について—」『日本の教育史学』第25号 (講談社 1982) pp.53-71

付録 「河村只雄日記行程表」

凡例

・この資料は、沖縄県公文書館所蔵「河村只雄資料」の「日記」(0000049937、0000055811、0000061307)の記載内容のうち、沖縄・台湾調査に関する記述を整理し、一覧表の形にまとめたものである。なお、閲覧・複写には閲覧用マイクロフィルム(T00021098B)を用いた。

・漢字は原則として新漢字を使用した。

・判読不能の文字は「□」とした。

・記述は原則として「日記」にならったが、補足が必要と思われる部分は「[]」で示した。また、「日記」からの引用は「 」で示した。

・見出しは下記の項目を左から配列している。

① 年 (西暦の下2桁を記載)

② 月日

③ 行程

④ 撮影 (写真や8ミリでの撮影に関する記述)

⑤ 人物 (特に記述のある人物。ただし、「行程」に記載した人物については省略した。また、敬称は原則として省略した。)

⑥ 『探求』(『南方文化の探究』のどの部分に相当するかを略号で示した。『南方文化の探求』は初版(1939年発行)の篇をもとに、「琉球文化の探究」=1、「高砂族文化の探究」=2、「八重山文化の探究」=3、「宮古文化の探究」=4とし、各篇の節番号との組み合わせで示した。例：1-4=「琉球文化の探究」の4節「那覇・首里の第一日」の内容)

年	月日	行程	撮影	人物	『探究』
36	10/19	12時10分神戸港から出帆。			
	10/21	正午頃名瀬港入港。午後2時半出帆。その間、名瀬港見物。			
	10/22	那覇入港。午前7時上陸。蓬萊館[宝来館](旅館)へ案内される。県庁訪問。波上宮参拝。宮司の特別な好意により宝物珍品等を見せてもらおう。首里城見学。島袋原一郎の案内で博物館見学。夜、志同会のメンンバーと懇談。		出迎え：樋口、千喜良、島元視学、新崎、仲田、川畑、阿波根、玉城 首里城同行：千喜良、樋口、新崎	1-4
	10/23	奥武山公園の招魂祭列席、その後糸満へ。白銀神社[白銀堂]参拝。糸満見学の後、市内の六新聞社に挨拶。25日から久高島へ行く予定であったが先方の都合が悪く、先に国頭方面へ行くこととなった。		朝、宿訪問：樋口、新崎 糸満同行：千喜良、樋口、新崎 糸満案内：玉城泰一糸満小学校長	1-5~8
	10/24	午前9時発国頭行きバスで名護へ出発。郷土研究に熱心な沖田第三中学校長に挨拶、懇談。奥行きを決意。午後5時、名護出発、辺土名へ向かう。大城旅館泊。		バスに同乗：千喜良	1-11
	10/25	午前7時10分前、宿の女将が借りてくれた自転車で辺土名出発。座津武の小屋に自転車預け徒歩で出発。途中に滝を見る。宜名真影。		辺土から奥へ案内：伊波辺土小学校長	1-12~16

